
ガンダムSEED Destiny 2nd TS

五月晴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンダムSEED Destiny 2nd TS

【Nコード】

N9808I

【作者名】

五月晴

【あらすじ】

月面での戦いでデュランダル議長の旗の下戦ったシンは、オーブでキラ達と和解した後、ステラとの約束を果たすために軍事裁判に臨むため、審判を待つ日々を送っていた。

だが、シンを迎えに来たのは裁判への迎えではなく、黄泉の国への案内人だった。

仕方がないと受け入れたシンだったが、いつの間にか過去に戻って
いて…

シンは新しい運命を切り開くことができるのか。

新たなる扉が今、開く。

- 01 - (前書き)

テレビ放送では悲惨で不幸な目に合い続けたシン君に愛の手を。

この小説は著しく原作を無視します。

彼の目的と行動に矛盾が出ておりますが、温い目でご鑑賞下さい。
以上、作者でした。

たった一発の砲弾で家族を失った。

力が無かった俺は、闇雲に力を求めた。

得た力があつた。護ることが出来る力を得たと思つた。けど…

俺に出来たのは破壊することだけ。護るなんて…出来なかつた。

月面で『無限の正義』を操るあの人に負けたとき、やっと分かつた。

俺は…俺には…護る力も才能も無いんだつて。

何もかもを人の所為にして反抗してきた俺は誰も救えずに、逆にあの人は多くの人を救つた。

俺には何も無い。壊すことしか出来ない…無力な人間…

壊すためだけに使つてしまつた相棒達。…本当にすまなかつた。

俺は…軍事裁判の後、地球の紛争地帯でのボランティアに参加することになっている。

ステラが教えてくれた。明日を掴むために…

だが、俺の前には血塗れのナイフを持った女性がひとりいる。その血は俺のもの…力が抜け、地面に倒れこんだ。戦争だったから…
それでは割り切れない人の復讐は当事者に向かう…。

俺は意識を手放した。

ガンダムSEED Destiny 2nd TS - 01 -

『C・E・71年6月15日』

携帯のディスプレイに映し出されている日付を見て、まず妹に頬を
ビンタしてもらった。

「……痛い。現実？」

「お兄ちゃん？」

して貰ったとはいえ随分とスナップの効いた一撃だった。もしかして、マユは自分のことを嫌っていたのではないかと疑うまでに。

「シン、マユ。準備は出来たか？行くぞ」

「うん！お兄ちゃん、行こう」

「……ああ」

俺たちの家族は住みなれた家を出て、避難船に乗るために港へ向かう。かつて、いやこの世界では数刻後におこる悲劇の地を通って。

先頭を走るのは荷持を両肩に担いだ父さん。その後ろ、俺の前に居るのが母さんと妹のマユ。その手にはピンクの携帯が握られている。

殿にいるのが俺だ。

俺たちの真上では、戦神となる予定のキラ・ヤマトが操るフリーダムが連合の新型3機を相手に舞っている。前はアレが放った一発のライフルで俺は全てを失った。

緑色の機体に向けて放った一撃が反射され俺たちの横を通り過ぎ、爆発が起こった。爆風によって転んだ妹の手からピンク色の携帯がこぼれ落ちて斜面を転がり数m下の木の根の所に引っかかった。

「あつ！マユの携帯！」

母さんはマユの手を引っ張り無理矢理にでも妹を連れて行くこととするが、携帯に手を伸ばす妹を連れて行くことが出来ない。その内少し先に行っていた父さんも戻ってきた。時間的にはこれが限界だろう。

「父さん、母さん、マユ！ごめん！」

俺は家族3人の身体を妹の携帯が落ちている斜面の方に向かって押した。

宙に投げ出された家族は俺のことをどうしてって顔で見ている。

俺の記憶が正しければ、あの時の銃弾は……。

俺が空を見上げると、降り注ぐ緑色の光線が落ちてくるのが分かった。それから……少し時間を置く。

次に俺が見た世界は紅く染まっていた。

左腕のあった所から喪失感がひしひしと伝わってくる。

無事に残っていた右腕も石や木の破片が突き刺さって黒い血が流れ出ている。左目に触れると潰れた卵のような感触と共に『ぷちゅっ』と音がした。

左腕の方へ持っていくとあるべきところに目的のものは無い。

今、俺と家族の立場が入れ替わった。たぶん、俺は此処で終りだろう。

マユはどうするのかな……

俺と同じでZ A F Tに入るのかな……

それとも別の道に進むのかな……

俺は見ることは叶わないけれど、マユならきっと……

結論的に言っと『俺』は死ななかつた。

前の世界でもお世話になったトダカ一尉に救助された俺は、病院の集中治療室でお世話になり一命を取り留めた。

ただ、顔の判別も難しいくらい火傷が酷かったらしく、俺の意識も戻らぬまま整形手術をしたそうで、事実上『シン・アスカ』という人間は死んだことになるが『俺』は生きることとなった。

あっ、そうそう失った左目と左手も新しいものを貰ったんだ。トダカ一尉がお金を出してくれたそうです。

前の世界では本当にごめんなさい。

それからヤキン・ドゥー工攻防戦の真っ只中らしいですよ。世間的には…。

俺はリハビリの最中ですけど。

顔の手術をしたので、まあ仕方が無いことなのですが、レイのようなポーカーフェイスを意図せず得ることが出来たのは良いことなのか不明だ。

ますます前の俺とは違いすぎる。只でさえ顔が変わって、右目が紅色の左目が翠色のオッドアイになっている上に、感情の起伏も見られないって……。どんだけ〜

リハビリを終えた俺を待っていたのは、これからどうするのかという現実問題だった。

父さんの仕事の関係上、俺はモルゲンレーテでテストパイロットをしていたし、それなりに知人も居る。

問題は軍の施設とモルゲンレーテの本庁が燃えたというか、燃やしたというか、自爆したというか、絶望的な状態であるということだ。戦争が終結した折には建て直されるんだろうけど…。

「まずは、住む所の確保だよな…」

俺はアスカ家に向かって歩いていく。

人通りはまばらである。避難してオーブ本国から出て行った人間も少なくはない。

道路には何か着弾したのか穴が空き、ビルには無残なほどの傷跡が残されている。

モビルスーツが通ったのか地面は陥没し車やバイクなどの走行は不可。

あれほど活気があったオーブはなりを潜めている。

「…………あつ…………」

俺はビルとビルの間で膝をついている状態のMS、M1アストレイを見つけた。多少傷ついているが動かせないほどではないと思う。

ハッチは開いたままになっていたから乗り込むことは容易だった。

「M1アストレイのOSは、ヤマトさんが作ったナチュラル用のものを使用している。……………実際かなり機体性能が下がっているよな、やっぱり……。OSの組み換え開始つと」

俺はボードを操作しOSを俺専用で組み替える事にした。

俺は、普通のコーディネイターだから、数十秒で完成なんてことは出来ない訳だし、たつぷりと時間はある。俺はゆっくりだが、確実に仕上げていった。

「よし！完成つと。MBF-M1アストレイ、シン・アスカ、行きますー！」

慣れとは恐ろしい。と思つて目を閉じた瞬間。

『其処の機体に乗っている者、投降してもらおうか』

ホールドアップされました。相手がオーブ軍で本当に良かったです、まる。

MBF - M1アストレイ

この機体は私たちオーブの守備の要となるはずだった。

だった、イコール要にはならなかったということの意味する。

制式化や就役後間もなく、ろくに組織的訓練や実働テストもせず
大西洋連邦のオーブ侵攻という戦場に出された。結果、壁にはな
たのだろうか。オーブの若い（20代）軍人（男）達の命が次々と
散っていった。

オーブ本島にいた人間は3種類に分かれた。ひとつは力ガリさまと
共に宇宙へと上がり今も戦い続ける道、ひとつは同盟国やアメノミ
ハシラというコロニーに避難したり連邦やプラントに亡命する道、
そして本島に残りオノゴロ島の撤去作業をしたりする道だ。

宇宙が上がった者たちは今もこの機体に乗って戦っているだろうが、
本島に残った人間は近寄りもしない。まともに動かせないものに乗
るよりかは、乗りなれた戦艦やヘリや戦車に乗ったほうが都合の方
がいいからだ。

なのに、市街地に取り残されていた機体がいきなり起動した。しか
も、機械的な動きしか出来ないはずのあの機体で背伸びまですると
は、パイロットは何者！？

降りてきた少年を見たとき、取り囲んでいた私たちの頬は恋する乙
女のように紅くなっていたことだろう。

何故か、オーブ軍の一員に加わってM1アストレイ隊の撤去作業の指揮を執ることになりました、シンです。

いきなり少尉という階級をもらい戸惑っております。

ZAFTにはなかった階級制度だしね。

隊の人たちだけでなく、整備班の人たちからも敬礼された時、苦笑いを浮かべた俺は悪くないと思いたいです。

開発室というプレートの貼られた一室から、モルゲンレーテのオレンジ色のジャンパーを着た女性が出てきた。俺の顔を見ると、身なりを少しだけ整えて向かってきた。

「少尉。先日出されたこの図案なのですが、どうやってもうまくいかないのです。従来のスラスターではいけないのでしょうか？」

「現在取り付けられているあのスラスターでは、仕事の効率やMSの運用が悪いんです。やはりこれの開発は必須かと思えます」

「そうですか……。では、開発室の方でお茶でも飲みながら詳しい話を……」

「ちょっと、待ちなさい！これから指揮官殿には市街地の瓦礫撤去作業を指揮していただかないといけません！ささ、こちらに」

と、俺の腕を引いて格納庫へ向かおうとする黒髪でショートカットの女性。

「馬場さん！？俺、さっき戻ってきたばかりなんですけど……」

「それは港近辺のことでしょう。私たちの所は人も時間も足りませんです！」

「時間と人が足りないのは開発班も同じです！」

格納庫へ連れて行かれそうになっていた俺の空いているほうの腕を掴んで引きとめようとする開発班の女性、名前は確かシャーリーさんだったかな。

ここに軍人である馬場さん対開発部代表のシャーリーさんによる綱引き（綱は俺）が開かれた。

お2人ともナチュラルなんだけど、力が物凄く強いわけですよ。

その内、ギャラリイもとい野次馬と援護者が現れて引き手が多くなり、綱として扱われていた俺はブラックアウトする羽目になった。

「……また、この天井か」

最近見慣れた光景になりつつある保健室の天井。

「女性のパワーはすごいなと、……外れた」

ここの保健室の室長を務めているのはマリアさんっていう未亡人だ。先日のオーブ侵攻の折、旦那さんは死んでしまったそうさ。よって、この保健室という閉ざされた空間は彼女の縄張り（テリトリー）。入ってきた若い男に狙いを定め、虎視眈々と襲うタイミングを狙っている。

どうやら俺は目標認定を受けたらしく、気絶している間に拘束されるなんてざらである。その度に左手の関節を外し手錠だったり縄から逃れたりして回避し続けている。

「シン君、遊びましょう」

カーテンを開けて入ってきたマリアさんにすかさず手刀を喰らわせて意識を刈り取る。

今日のコスチュームは『女教師』か？好きだなあ、年下を襲う系。

俺はマリアさんを俺が寝ていたベッドに寝かせ保健室をあとにした。

「うづ〜ん。シン君のおいがいっぱい……」

「……………」

別のベッドに寝かせればよかったかも。

なんでこんなことになっているのか。

オーブ軍の人員構成を見て愕然とした記憶はまだ新しい。

トダカー尉を始めとした男の軍人は10%程で残りは女性だということ。モルゲンレーテに至ると94%が女性ではないか。しかも、20代以下の人間で男は俺ひとりという馬鹿げた事態。

そして、とっておきがこれだ。

俺のいた世界では自由と正義の名を持つMSを駆って戦っていた英“雄”キラ・ヤマト、アスラン・ザラの2人が見事女性化しているらしい。あの顔でDを持つなんて……。

どどん肩身が狭くなっていつている気がする。そのとき、『ポンッ』と肩に手を置かれた。

「ウナト…さん？」

「私の所のウナと結婚しないか？」

「遠慮します」

「頭脳明晰、運動神経抜群、MSの操縦技術も高く、何かと世話焼きだと聞く」

やばい…。肩をすっかりとホールドされていて逃げる事が出来ない。というかアンタ、同盟国に避難しているんじゃないのかよ！

「その上、家族を失ったが今も誰も居ない昔の家に帰っているのだから？ウナと結婚すれば万事解決だ。気立てがよく、夫を立てて、少しばかり冗談が過ぎるところと、ドジッ娘の称号を与えるに相応

しい行動に目を瞑れば、よき妻になるぞ」

いやいやいや。ありえない。前を知っているだけに、少しばかり冗談が過ぎるって洒落にならないから！

「それに私は首長連合に属する身だ。何かと支援できると思つが」

「俺……まだ、14なんですけど」

「大丈夫だ。ユウナは19歳。身も心も清い乙女だからな」

「……えん」

「お父様！」

俺の言葉を遮って現れたのは薄紫色の長い髪を揺らして清楚に近づいてきた女性。タイミング的に種割れしないといけないと思う。

「！……ユウナか？お前は本島にいるはずでは！」

「そんなことはよいのです。はじめまし……あら？お父様、アスカ様はどちらに？」

俺は、動揺したウナトさんの魔の手から逃れて、全速力で逃げ出した。

向かうはオーブ軍の良心、トダカ一尉の元へ。

軍部のとある一室。

「はあく。心が安らぎます」

俺は茶を飲みながら一服する。俺の正面にはトダカ一尉他数人の男の軍人さんが座っている。

ちなみに年齢も階級も上の方ばかりである。

「我々もアスカ君が来てくれた事によって助かっているよ。特に若い女の娘たちを一身に惹き付けてくれている所とかね。我々にも家庭があるから、どうしたものと頭を抱えていたんだが万事解決した」

「……は？」

「アスカ君も知っているだろう。18年前に広まった新型ウィルスのことを」

「……??？」

「ユーラシア大陸で発症した未知のウィルスは全世界に広がり、月やプラントでも蔓延した。これによって、若い男衆は次々と命を落とし、新たに生まれてくる子供たちも皆女の子。オーブでも巻き起こったよ、人類の終りがすぐそこまで来ていると。」

「だが、ある赤ちゃんが生まれたことによって状況が変わった。プライバシーも考慮して明かされなかったものの男の子の赤ちゃんが生まれたというのだ」

「まさか……」

「そう、それが今から14年前の9月1日だよ、シン・アスカ君」
やばい。あのまま天国に召されていれば良かった。トダカさん、俺はアンタを憎む！

えっと、じゃあなにか。俺が知っている人間は全員女性化している可能性があるとでもいうのか？

どんな地獄だ！レイが女として俺の前に現れたら、絶対に泣く自信があるぞ。

むしろ、全世界の女性たちから狙われる可能性大？

「短い間でしたが、お世話になりました。無人島に引っ越させていただきます。」

「そんなことできると思うのかな」

「ですよー……」

俺は逃げられない。

秘密裏に脱出用のデステイニー作ろう……。

俺は心の中で硬くそう決意した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9808i/>

ガンダムSEED Destiny 2nd TS

2010年10月21日06時58分発行